MHF廃人
～第4章～

ネカフェでのイベントで私はかなりの数のＭＨＦ廃人と知り合いになれた。
その知り合いのそのまた知り合いの友人というなんとも遠い間柄ではあったが、
ＭＨＦ廃人の一人沼田狐太郎(仮名)に話を伺うことになった。

沼田はまさに絵に描いたような風貌の廃人であった。
背丈は１５０センチ台でまるで相撲取りのような体型。
背中は常に曲がっており髪はぼさぼさ、目は開いているかわからないほど細く鼻はぺちゃんこに潰れている。今回の待ち合わせ場所のカフェにはどこで売っているか見当もつかないようなパジャマ素材の服装を着て現れた。

私と沼田を見る周りの視線がかなり痛かったが廃人エピソードに期待が持てそうで実際はかなりわくわくしていた。沼田は緊張していた。おそらくこういった女性やカップルがたくさん集まるところにはあまり来たことがないのだろう。

もしかしたら人と会うこと自体が久々だったのかもしれない。
初めは世間話から入ったのだが、私の言葉に頷くだけでまったく口を開こうとしなかったのだ。
ＭＨＦに限らずオンラインゲームをプレイしている廃人たちの中には、現実世界の人間とコミュニケーションをとることが苦手なタイプも少なくない。沼田もそんな中のひとりなのだろう。
ますます興味がわいた私は、私が質問をして沼田が答えるという形式を作りなんとかＭＨＦに関しての廃エピソードを聞き出すことに成功した。

沼田の現在の１日ＭＨＦ平均プレイ時間は５時間ほど、廃人と呼ぶにはどこかものたりない感じの答えで私は最初拍子抜けした。

「やりたいことはほとんどやってしまって、次のアップデートまでやることがないんです。それでも毎日かかさず５時間プレイするって異常でしょう？あなたはやり終わったゲームを毎日５時間できますか？」

確かに沼田の言うとおりである。へんてこな形ではあるが彼もやはりＭＨＦに魅了された廃人なのだ。
沼田がＭＨＦにはまったきっかけは友人の紹介だった。

「僕が始めた時は友人を紹介すると強い装備をもらえるサービスがあって、僕の友人はそのアイテムほしさに僕を誘ったのだと思います。もともとアニメやコミックは好きだったけれどゲームに興味がなかった僕は最初の１カ月が過ぎたら(課金がきれたら)やめようと思ってました。けれどもやり始めると思った以上に奥が深くておもしろかった。苦労して集めたレアアイテムを使って新しい武器や防具を作ることにとてつもない喜びを感じ、みるみるはまっていってしまったんです。最初の１カ月でやめるどころか次の月からはカード引き落としの継続課金にしてました」

その後沼田を見事ＭＨＦの課金螺旋へと導いた友人と数カ月間は楽しくＭＨＦライフを送ることとなった。
しかしそれも長くは続かなかった。

時間がたつにつれてＭＨＦの深みにはまっていってしまった沼田。風呂にも入らず、トイレにもいかず、歯も磨かずモンスターを狩猟しつづけた。
当然眠る時間も最小限に抑えて生きる時間すべてをＭＨＦに捧げた。

ＭＨＦは時間をかけた者を裏切らない。
時間をかければかけるほどその分強い武器、魅力的な防具が手に入る。
良い装備が手に入ればさらに強いモンスターに挑めるようになり、またさらに強い装備が手に入る。
沼田と友人との戦力差は徐々にだが確実に開いていき、要求する動きも変わってきた

「ＭＨＦは一つの武器や防具を作るのに同じモンスターを何十回も何百回も倒さなければならないんです。そこで僕は短時間に効率よくモンスターを倒せるようにハメをします。しかし友人はハメなんかやらずに楽しく狩りたい。その対立が何度か続き、時には喧嘩になった時もありました。それでしだいにギクシャクしてきて友人とは一緒に狩りにいかなくなりました。それからしばらくリアルの方でも会わなくなって、久々にメールが来たのでそれとなく聞いてみたら友人はＭＨＦを引退してました。武器や防具を見せ合うことができる友人がいなくなったのはすごく悲しいことでしたが、いまさらやめることもできません。僕はそれからも猟団の仲間やオンライン上のフレンドたちと狩り続けました。」

廃人とライトユーザーが根本的なところでは絶対に混じり合うことができないということを改めて思い知らされた。
ネットゲームははまればはまるほどやめる機会を失いやすい。廃人の中にはやめる機会を失ってしまいやめたくてもやめられない人が大勢いるに違いない。やめたら自分一人だけ違う世界に取り残されてしまうような不安な気分になりどうしてもやめられないのだ。完全に薬物と同じで中毒状態である。

しばらく話しているうちに沼田は緊張がほぐれてきたのか私が質問する以外にもさまざまなことを語り始めた。

「結局オンラインゲームをやる最大の理由は人とのつながりなんですよ。僕は方向性の違いでリアルの友人を一人失いましたが、それでもオンライン上には僕と同じ思考で同じ狩りをしてくれる仲間たちがまだまだたくさんいます。自分がほしい素材や仲間がほしい素材を互いに手伝いあってゲットしにいったり、時には同じモンスターを十数時間連続で何度も何度も狩り続けるなんてことをしたこともあります。たとえオンライン上だとしても、友人は友人なんです。リアルの容姿がどんなだとか、リアルではどんな職業についているだとかは知らなくてもいいんです。
もちろんチャットでＭＨＦ以外のことを話すことだってありますよ。自分がまったく知らないこと、例えばこの映画がおもしろいだとかあそこのコンビニのソフトクリームはおいしいだとかいろいろね。そうやって人と繋がりを持つことが楽しいんです。僕の友人の中には狩りをまったくせずにチャットばかりやってる人間もいますしね。リアルよりも簡単に友人が作れるし、チャットだと思っていることを言葉にしやすい。もし関係が駄目になってもその人をブラックリスト（迷惑登録）にすれば簡単に友人関係を解消できる。深く考えずに人とのつながりが気楽にできるからリアルの何千倍も楽しいですよ。」

仲間同士でひとつの目標に向かいそれを達成することがオンラインゲームの醍醐味であることに間違いはない。しかし沼田の考えはなんとなく現実世界を否定するように感じられた。
彼にとってはごくあたりまえのことなのかもしれないが私は聞いていて寒気がしていた。
それは、もし私の余命が通常の人間と同じであれば近い将来確実に沼田と同じ考えになっていたと感じたからなのかもしれない。

最後に沼田はおもいもよらない言葉を発した。

「最近生まれて初めて彼女ができたんです。１日５時間しかＭＨＦにログインしなくなった理由も実は彼女と一緒にいる時間を大切にしたいからってのが一番の理由です。デートは二人でネットカフェに行くことが多いのでついでにＭＨＦもできて充実しています」

急に頬を赤らめて胸に手をあてながらおとめチックな口調になった沼田がなんだかすごく気持悪かったが、せっかくなので廃人の恋愛というものがどんなものか話を聞くことにした。

「彼女の写真か何かあれば見せてくださいよ！沼田さんの好みがどういう子なのか見てみたいな」
「ハハハ、いいですよ。まあmiruさんもかなりかわいいですが僕の彼女には勝てませんね。あまりのかわいさにびっくりして腰を抜かさないでくださいよ」

沼田は私に彼女を見せてくれた。なるほど確かに目が大きく、鼻立ちもはっきりしている。
しかし意味がわからない。
それは私が今まであまり恋愛を経験したことがないからなのかもしれない。
ただニンテンドーＤＳの画面に表示されている絵の女の子を彼女と言って私に見せる沼田の顔がかなり気持ち悪いことだけは確かだった。